

ペン俳句会 句会報(三百五十八号)

令和六年七月四日(木)

兼題『菖蒲』、席題『水』

句会を、今年五月と同じ場所で開催。出席は十名

(大阪の金魚姫さん欠席)。(投句十一名)

松田 一文字

朝焼や湖面占めたる逆さ富士

菖蒲湯の香を身にまとひ先ず一献

さみだれの雨だれを聞く足湯かな

朝靄にかすむ木道ほととぎす

遠雷や池に水輪の五つ三つ

遠近を行き交ふ白帆雲の峰

中村 晃也

脚の数の水輪操り水馬

喪の列を歪んで映す菖蒲池

足先で湯加減を見て菖蒲の湯

梅雨晴れや北山杉のみどり濃く

碧潭の鮎水青きこと知らず

夕日背に梔子の花錆びにけり

森田 元斐

ただならぬ白さ貫く梔子の花

青蘆の狭める川へ梅雨出水

中庭の揺るがぬ緑病癒ゆ

束の間の水高に知る梅雨の入り

鳩の子を踏まぬ間合ひや夏来たる

雨の中紫陽花やはり雨の中

長尾 進一郎

静けさや微かに届く遠花火

紫陽花に生気の戻る俄雨

水の面や早苗の列に乱れ無し

下校児の声駆け抜ける夏木立

草草のひしめき夏の庭狭し

池の面に映りて揺るる菖蒲かな

新田 ゆふき

水無月はこんなにも水多摩のはけ

短夜の空のあわひや父母眠る

髪軽くヘアサロン出て夏燕

マンシヨンの四角く囲む夏畑

きまぐれに菖蒲入れたり母の風呂

雨上がるまた雨を待つ梅雨木立

宮原 凧

紫陽花の夕べの雨に色増せり

片仮名語溢れる渋谷薄暑光

噴水の光一閃不帰の客

園庭に水音満ちて夏盛ん

真直ぐなり蒼の深まる花菖蒲

白南風や眠りに落ちる雨の音

安藤 晃二

御立ち台にカメラマン群る菖蒲池

風呂敷の濃き紫や花菖蒲

水郷や菖蒲のかげを頬に受け

広き原に孤高のむらさき杜若

恥じらへる登校男児菖蒲手に

黄菖蒲の蒙古よろしく池侵す

大津 そうかい

「銀恋」の流るるホーム梅雨も良し

山峡の駅を浮き上げ青嵐

父の日や湯船に往事辿りける

深酒の反省しきり梅雨の朝

夏暁や媪水撒く神社前

水車小屋の崩れそな屋根花菖蒲

浜口 金魚姫

雨粒のひとつひとつに梅雨の色

手を繋ぎ八つ橋軋む菖蒲園

黄模様に光集めて花菖蒲

書の蝶が画廊飛び出す梅雨の街

紫と黄の折り紙や菖蒲園

石投げて夏空揺らす水たまり

志村 良知

兄を追へば菖蒲の群るる池の土手

七夕竹口ビーに笹の香願い事

ラベンダー園ソフトクリームも香りして
枯れ木立つ青白き水夏の雲
メロン選る農道に沿ふ畑の店
スコトンと言ふ名の岬夏寒し

西川 知世

少年のリユックの膨ら山開き
翅を閉じ夏蝶昏し江戸城址
走り茶や母在りし日の茶器を出し
背ナの荷を下ろし人待つ岩清水
泰山木の花の錆び初む夕間暮れ
菖蒲田に夕陽溜れる閑かかな

次回は令和六年八月一日(木)、
兼題は季語「七夕(たなばた)」(松田一文字さん出題)、席題は西川知世さん出題の「残」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

兼題「七夕」は親しみのある季語。最近七夕竹はいろんなところで目に付く。家庭ばかりでなく幼稚園や学校、商業施設などなど。それにつれて陽暦七月七日に行われることが多くなった。

現在、平塚の七夕飾りに代表される七夕祭は戦後商業振興策として始められ、商業力に裏付けされた豪華さに特徴を持つ。開催後は仙台へ移動、八月八日を迎える。本来の牽牛織女の話から離れ

て日本の商店街の夏のまつりの一大イベントのひとつ。季語としての七夕とは一線を画す。季語の受難時代を象徴する季語であるう。

七夕は陰暦七月七日のこと。それとともにその日おこなわれる行事を指す。江戸幕府が年中行事に取り上げ武家の風習となり、庶民へ普及し、国元にも普及していった。季語の本意は、中国と日本の伝説文化が集合したもので、二星の相会に祈って文字や裁縫の上達を願う行事と、神の来臨によるみそぎの行事とが中心の要素。

傍題 七夕祭 星祭 秋七日 七夕竹 七夕送り 星迎え など。

たなばたの天横たはる廓かな	後藤夜半
七夕の一粒の雨ふりにけり	山口青邨
七夕やつねの波漕ぐわたし守	水原秋櫻子
七夕や男の髪も漆黒に	中村草田男
七夕竹惜命の文字隠れなし	石田波郷
七夕やまだ指折つて句をつくる	秋元不死男
七夕や髪ぬれしまま人に逢ふ	橋本多佳子
天ざる鄙に住みけり星祭	相馬遷子
七夕の結ふ間も舞へる色紙かな	大橋桜坡子
七夕竹泛べ疾き最上川	前田鶴子
病室の隅のクレヨン星祭	井堀博子
幼な文字てっぺんに吊り星迎ふ	米谷敬子